

課題解決型ミーティングの導入による非認知的スキルの変容 ～中学女子バスケットボール選手を対象として～

コーチング科学研究領域

5023A057-6 福山 莉音

研究指導教員:倉石 平 教授

I. 序論

非認知的スキルとは、「粘り強さ、好奇心、自制心、誠実さ、社会情動的な性質等」（加藤，2019）であり、非認知的スキルの獲得が社会的・経済的成功に結びつきやすいと報告されている（J. J. ヘックマン，2015）。また、これまでの研究により、スポーツを通じて非認知的スキルが育まれることが示唆されている（夏原・加藤，2017；山北ほか，2018）。しかし、単にスポーツを行なうだけではスキルを獲得できず（Bakker，1999）、「日常でも役立つスキルの獲得を意図した適切な環境設定や関わり、および指導が必要」（高橋ほか，2019）であると言われており、介入研究の重要性が示唆されている。また今日では、非認知的スキルを学校教育の中で育むことが重要であると考えられており（OECD，2015）、思春期の始まりに当たる中学生期に非認知的スキルを育成することが重要であると考えられる。しかし、スポーツ場面における、中学生を対象とした非認知的スキル獲得を目的とした介入研究および非認知的スキルの測定尺度は少ない。また、非認知的スキルの獲得を目的としたこれまでの介入研究により、積極的に他者と関わる介入プログラムの重要性が示唆されている。チームスポーツや部活動において、チームメンバーとコミュニケーションを図る場としてミーティングが挙げられるが、ミーティン

グを介入プログラムとした研究は少ない。そこで本研究では、研究Ⅰにおいて、スポーツに取り組む中学生用の非認知的スキルを測定する尺度を作成し、尺度の信頼性および妥当性を検討することを目的とする。また、研究Ⅱにおいて、介入プログラムを「課題解決型ミーティング」と名付け、課題解決型ミーティングの導入による中学女子バスケットボール選手の非認知的スキルの変容を明らかにすることを目的とする。

II. 研究Ⅰ

方法

2024年6月から2024年9月に、運動部活動に所属する中学生を対象とし、質問紙調査を実施した。291名（男性156名、女性129名、その他1名、不明5名、有効回答率64.5%）を分析対象とした。

調査項目は、専門家会議での議論をもとに、中学生がスポーツを通して身につけたい非認知的スキル・心理的要素として、「心理的安全性」、「動機づけ」、「課題解決スキル」、

「協働スキル」の4つを選定し、すべて6件法で回答を求めた。

因子構造の検討を行なうため、それぞれのスキルにおいて主因子法、Promax回転による探索的因子分析を実施した。また、Cronbach's α 係数の算出による信頼性の検討、確認的因子分析およびSpearmanの順位相関係数によるMulti-trait Scaling分析を用

いて構成概念妥当性を検討した。分析には IBM SPSS Statistics ver.29 および IBM SPSS Amos 29 Graphics を使用した。

結果および考察

探索的因子分析および専門家会議による内容的妥当性の検討を行なった結果、目標達成スキル尺度 (4 因子 14 項目)、個人の協働スキル尺度 (2 因子 9 項目)、自分で考え、信じる力尺度 (2 因子 7 項目)、チームのつながり尺度 (3 因子 11 項目) の 4 つの尺度が作成された。そして、それぞれの尺度が一定の信頼性と十分な妥当性を有していると解釈された。

III. 研究 II

方法

女子バスケットボール部所属の中学 1 年生 10 名、2 年生 5 名の計 15 名を対象とし、2024 年 7 月 2 日から 2024 年 10 月 4 日までの 95 日間でミーティングを計 18 回実施した。研究 I で作成された尺度を使用し、介入前と介入後に回答を得た。

課題解決型ミーティングについて、練習や試合の前に、取り組む課題とその改善策を確認する「意識づけミーティング」を行ない、練習や試合の後に、設定した課題に対する振り返りを中心とした「振り返りミーティング」を行なった。即時に映像を振り返ることができるシステム (『トレンド』: パナソニック社が企画開発した自動撮影サービス) を活用し、3 人から 4 人の小グループで話し合った後に全体で共有するようにした。

11 因子に対して、介入前後の中央値を比較する Wilcoxon の符号付順位検定を行なった。統計処理は IBM SPSS Statistics ver.29 を用いて実施し、有意水準は 5% とした。

結果および考察

介入前後における 11 因子の中央値の比較

は図 1 の通りである (図 1)。問題解決因子と自分で考える力因子において、介入前後で有意な向上がみられた ($Z=2.082$, $p=.037$, $r=.538$) ($Z=2.039$, $p=.041$, $r=.526$)。課題解決型ミーティングの振り返りプロセスや、小グループで話し合い、積極的にコメントし合うこと、そして映像を使用することといった特徴が、それぞれのスキル向上に影響を与えた可能性が示唆された。一方、コミュニケーション因子において、介入前後で有意な低下がみられ ($Z=-2.327$, $p=.020$, $r=-.601$)、チーム内の特定の状況や外的要因が影響を与えた可能性が示唆された。介入前後で有意な差がみられなかった因子については、スキルを育むためにはある程度の期間が必要であることが報告されている (Heckman et al., 2006) ことから、本研究における 95 日間の介入期間ではスキルを育むことが難しかった可能性が考えられる。今後の課題として、介入群と非介入群を比較したり、ミーティング介入以外の要因を統制した研究デザインを用いたりする必要性が挙げられる。



図1 介入前後における中央値の比較

IV. 文献

J.J. ヘックマン:古草秀子訳 (2015) 幼児の経済学. 東洋経済新報社:東京, pp.10-42.
OECD (2015) Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills. OECD Skills Studies, OECD Publishing, p.13.